シャンカラ派における信 (śraddhā) の概念とその意味

澤 井 義 次

はじめに

現代インド社会において、シャンカラ (Sankara, 七〇〇―七五〇ころ) はヴェーダーンタ哲学者として有名であると同時に、シャンカラ派伝統の開祖としても知られ、幅広く人々によって尊崇されてきた。本論は、シャンカラ派伝統における信仰の様相を宗教学的に考察しようとするものである。そのためには、その伝統の教義としての意義をもつシャンカラの思想、および伝統的な慣習や儀礼などの具体的信仰の両レベルに注目する必要がある。ここでは、シャンカラ派伝統における「信」(śraddhā) の意味を「バクティ」の語と関連させながら分析し、その分析をとおして、シャンカラ派伝統における「信」の概念とその意味を明らかにしたい。

一 シャンカラ派の思想としての「信」とその意味

まず、シャンカラ派の開祖として信じられているシャンカ

ラが、「信」(śraddhā) の語の意味をいかに論じているのかに注目したい。シャンカラは『バガヴァッド・ギーター注解』と諸ウパニシャッド注解において、「信」を『ヴェーダ』の教えを肯定する判断⁽¹⁾(astikyabuddhi)と説明している。たとえば、『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド注解』において、「信」を次のように規定する。

信とは不可見の目的のための儀礼行為とか神々などに関して、『ヴェーダ』の教えを肯定する判断である。不信 (asraddhā) とは、これと反対の判断のことである。⁽²⁾

śraddhā adīśārtheṣu karmasv astikyabuddhir devatādiṣu ca/ asraddhā tadviparītā buddhiḥ/

また、『チャーンンドーグヤ・ウパニシャッド注解』では、シャンカラは次のように言う。

信とは思慮の対象に対する尊敬〔の感情〕である。すなわち、それは『ヴェーダ』の教えを肯定する判断である。⁽³⁾

mantavyaviśaye ādaraḥ astikyabuddhiḥ śraddhā

シャンカラによれば、出家遊行者 (sannyasin) は『ヴェーダ』を肯定する信を保持すべきである。⁽⁴⁾ ここで言われる「信」は「心の作用」 (hridayasya vṛttiḥ) ⁽⁵⁾ である。それは意味論的に、宗教的関わりとしての「信仰」よりも狭い概念である。それは、信が「知識の獲得のための手段」 (jñānalabhyupāya) ⁽⁶⁾ であり、聖典や師の言葉への「信賴」 (viśvāsa) ⁽⁷⁾ を意味する。パウルのハッカー (Paul Hacker) の指摘を待つまでもなく、シャンカラの言う「信」とは、聖典や師の言葉への信賴であるばかりでなく、それらの言葉を適切に理解するための先行要件である。

次にシャンカラ派伝統において、伝統的にシャンカラに帰せられる哲学文献の中で、「信」の意味がどのように説かれるのかを考察したい。文献学的にはシャンカラの真作ではないが、⁽⁸⁾ シュリンゲリー僧院の伝統では、『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』(Vivekacūḍamani) はシャンカラの著作の中で、最も重要な文献であると言われる。その文献には、「信」は次のように説かれている。

聖典や師の言葉を、それらが真理であるとの判断でもって確認することは、善なる人びとによつて、それを通じて実在〔の知識〕が得られる信 (sradha) と呼ばれる。⁽⁹⁾

śāstraśya guruvākyaśya satyabuddhyāvadhāraṇā/
sā śraddhā kathitā sadbhīṇ yayā vastūpalabhyate//

この頌が示すように、それらの言葉を真理であると判断す

る信によって、ブラフマン（アートマン）の知識を得ることができるといふ。さらに同書によれば、信はブラフマン（アートマン）に到るための準備段階を構成する六つの「徳」（guṇa）のうちの一つである。六徳とは静穩（śama）、自己抑制（dama）、世俗的行為の停止（uparati）、忍耐（titikṣā）、信（śraddhā）ならん専心（samādhāna）である。⁽¹⁰⁾これら六徳は出家遊行者の解脱に、とつて不可欠である。とりわけ、解脱に到達するためには、聖典と師の言葉への信が特に重要である。

さらに文献学的にみれば、シャンカラの真作ではないが、伝統的にシャンカラに帰せられてきた『全ヴェーダーンタ哲学精髓概要』(Saravedāntasiddhāntasāraṅgraha)も、解脱に到達するための信の必然性を、次のように説く。⁽¹¹⁾

信は、師やウパニシャッドの言葉に関して、それらが真理であると確乎たる判断である。それは解脱に到達するための前提条件である。

gurvavedāntavākyeṣu buddhir yā niścayātmikā/
satyam ity eva sā śraddhā nidānaṃ muktisiddhaye//

信をもつ修行者にとって、解脱に到達した師の言葉は、意味論的に、主宰神の言葉と同じ意義をもつ。したがって、それは聖典の言葉と同じ意味あいをもっている。

二 信 (śraddhā) とバクティ

シャンカラ派伝統には、マードヴァの著作と言われるシャンカラの伝説的伝記『シャンカラの世界征服』(Śaṅkaradigvijaya)がある。マードヴァとはシュリンゲリー僧院の第一二世世師ヴィドヤラーヤ (Vidyārāya, 伝承によれば、一三三一年に出家遊行、一三八六年に離身解脱) の出家以前の名であると言われる。この著作はシュリンゲリー僧院が認める唯一の権威あるシャンカラの伝説的伝記である。⁽¹²⁾ この伝説的伝記に記述される「信」は次の三つに分類される。すなわち、① 聖典や師の言葉への、出家遊行者の信、② 聖典への庶民の信、③ 対象が限定されない信である。⁽¹³⁾

シャンカラ派伝統(スマールタ派ともよばれる)の信者、K・アイヤー (K. Aiyar) は、信を「聖典の真理と宗教的な師(グル)の言葉への信仰」(belief in the truth of the Holy Scriptures and the words of the Spiritual Guru (Master))として説明しているが、信を英語の faith と訳していることは興味深い。⁽¹⁴⁾ また、シュリンゲリー伝統から出版された文献の中で、信は earnestness とか faith in ourselves などと表現されている。⁽¹⁵⁾ このように「信」の語が英訳されるとき、シャンカラの使った本来の意味では使用されずに、宗教的関わりという広義の概念になっていることは注目すべき点であろう。

シャンカラ派における信 (śraddhā) の概念とその意味 (澤 井)

三 シャンカラ派におけるバクティとその意義

シャンカラの哲学において、バクティは解脱へと間接的に導くものである。それは有属性ブラフマン、すなわち神的存在への人格的な関わりである。シャンカラは二通りにバクティを説明する。すなわち、① 解脱のための漸次的な準備段階にあるバクティ、② 「最高の実在の知識によつて特徴づけられるバクティ」(paramārtañānalakṣaṇām bhaktim)⁽¹⁶⁾ である。後者の説明、すなわち「知識」とバクティとの等置は、それが彼の『バガヴァッド・ギーター注解』に見られることを考慮すると、シャンカラは自らの哲学的な視点から、『ギーター』⁽¹⁷⁾ に出てくるバクティを知識として解釈しようとしたことを示す。シャンカラの言うバクティはシュラッダーと同じではない。『ウパデーシャ・サーハスリー』(Upadeśasāhśrī) の 1.16.67 に出てくる śraddhābhakti という相違釈 (dvandva) が示すように、シャンカラはシュラッダーとバクティを区別し、宗教的な関わりにおいて、シュラッダーがバクティに先行すると論じている。たとえば、『ギーター注解』によれば、

… 信 (シュラッダー) をもちながら、すなわち、信をもっている者であつて、私〔主宰神〕を崇拜する (bhajate)、すなわち尊崇する者は…。

… śraddhāvān śraddadhānaḥ san bhajate sevate yo mān sa...

シャンカラ派における信 (śraddhā) の概念とその意味 (澤井)

一一三〇

と記されるが、彼のシュラッダー先行論は『ギーター』を注釈する際、そのテキストの内容に沿って説明されている⁽¹⁸⁾。

シュリンゲリー僧院では、シャンカラの哲学文献は『ヴェーダ』聖典の本義を正確に述べたものとして、解脱に到達するための指針を示す教典的な意義をもつ。特に『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』が尊重される。この哲学文献をめぐって、今日のシュリンゲリー伝統は、シャンカラの哲学を宗教理念として堅持しながらも、彼の哲学を拡大解釈している。たとえば、『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』では、不二一元論者のバクティはシュラッダーよりも重要なものと記されている。すなわち、

解脱〔に到達するため〕の手段の中では、バクティが最も重要なものである。自らの本質の探究 (svasvarūpānusaṁdhāna) がバクティであると言われる⁽¹⁹⁾。

mokṣakāraṇasāmagryāṁ bhaktir eva garhīyāsi/
svasvarūpānusaṁdhānam bhaktir ity abhidhīyate//

この頌を注釈して、シュリンゲリー僧院の第三四代世師チャンドラシェーカラ・バーラティー (Candrasekharabharati) は、シャンカラがバクティを「我 (アトマン) の悟得に到るための直接的な(内的な)手段」とみなしていると説明し、さらに、

自らの本質の探究 (svasvarūpānusaṁdhāna) とは、深遠な反復的瞑想、すなわち瞑想 (nididhyāsana) のことである。それだけが直接

的な悟得への直接の手段として役立つのである⁽²¹⁾。

と言う。『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』が「自らの本質の探究」として規定しているバクティは、不二一元論思想の立場から理解されるものであり、出家遊行者の宗教的関わりを特徴づける。世師もこのバクティを瞑想 (nididhyāsana) と同一視している⁽²²⁾。したがって、このバクティは一般的に神的存在と人間との関わりにおいて論じられる、神への敬虔で専心的な信愛あるいは敬慕としてのバクティと区別して理解される。敬虔な信愛あるいは敬慕としてのバクティは、瞑想 (nididhyāsana) のための「直接的な内的手段」であり、「瞑想のための手段」の中では、最も優れたもの⁽²³⁾として、世師によって説明される。

さらに、スマールタ派在家者のバクティにも少し言及しておこう。今日までシャンカラ作であると伝承されてきた多くのバクティ讃詩 (bhakti-stotra) は、神への敬虔なバクティを強調する。それらはシャンカラの哲学の枠組や語彙から判断すると、そのほとんどが彼の著作ではないが、この伝統の人びとは、シャンカラが在家者のためにバクティ讃詩を書き誌したのだという強い信念を抱いている。この事実、この伝統における具体的信仰の一断面を示すとともに、バクティ讃詩が在家的な信仰を反映していることを暗示している。たとえば、『ダクシナムールティ・ストートラ』 (Dakṣiṇāmūrtistotra) には、スレーシュヴァラ (Sreśvara) の『注釈』 (Vṛttika) が伝

えられるが、このバクティ讃詩は、神や師へのバクティを知識 (jñāna) の達成に必須なものであると論じている。すなわち、

神に対して、また神に対するのと同様、師に対して、最高のバクティをもつ優れた者にとっては、これらの教えられた真理が輝くのである。⁽²⁵⁾

yasya deve parā bhaktir yathā deve tathā guru/

tasyaite kathitā hy arthāḥ prakāśante mahāmanah/

『シヴァーナンド・ラハリー』(Śivanandalahari) は、「心の作用」(cetovrtti) であるバクティが熟したとき、それは生きながらに解脱に到達すること、すなわち生身解脱 (jivamukti) へ導くと記している。⁽²⁶⁾ また『サウन्दルヤ・ラハリー』(Saundaryalahari) も伝統的にシャンカラに帰せられているが、W・ノーマン・ブラウン (W. Norman Brown) によれば、おそらく西紀千年以降の創作であるという。⁽²⁷⁾ このバクティ讃詩はシュリンゲーリの「最高のシャクティ」(parāśakti) すなわち「シャラダーンバー (Śaradambā) の栄光」について述べており、タントリックな特徴をもつ。⁽²⁸⁾ 母なる神 (Devī) の直観すなわち絶対原理との同一化は、母なる神シャラダーンバー (あるいはシャラダー) の恩寵を得ることによって可能になる。

シュリンゲーリ僧院を中心としたシャンカラ派伝統では、シャクティ (śakti, 性力) 崇拜はシュリー・シャラダーの崇拜形式をとっている。ŚDV はシャラダー崇拜がシュリン

ゲーリ僧院の開祖シャンカラによって始められたと記している。⁽²⁹⁾ インド思想史的な視点からみれば、それは歴史的事実とは考えにくいが、今日、シュリンゲーリのシャンカラ派伝統では、周知の事実として認識されている。

おわりに

シャンカラ派では、シュラッダーはカルマンに関わっていない。ちょうど、バクティを伴わないカルマンがありえないのと同じように、いかなる形式のカルマンも伴わないようなバクティは現実にはありえない。パウル・ハッカーも指摘しているように、バクティと類似しているバジャナ (bhajana) も、しばしば「純粹に精神的なもの」(ein rein geistiges) であるが、それは「行為」(ein Tun) である。⁽³⁰⁾ インド内外を問わず、いかなる宗教伝統においても、儀礼行為に伴う内面的な関わりは個人やその場面によって変わる。スマールタ派信者の K・アイヤーの報告によれば、⁽³¹⁾ シュリンゲーリのシャンカラ派においては、「ふつうの人びとは祭式の効験に対する信仰 (faith) に欠けている」という。彼らはバジャナを「神に対して直接に訴えかけるもの」とみなし、バジャナに頼っている。この点に、バクティに傾斜しているスマールタ派庶民の具体的な信仰のあり方を垣間見ることができる。

シャンカラを開祖とするシャンカラ派の宗教伝統におい

シャンカラ派における信 (śraddhā) の概念とその意味 (澤井)

一一三二一

て、出家遊行者の「信」はグル・バクティや瞑想の中に具体的に表現される。他方、スマールタ派庶民の「信」はカルマンやバクティ、特にバクティの中に顕著に見られる。これらの宗教的コミットメントは、相互に有機的連関を成しながら具体的なシャンカラ派信仰を構成している。これまで論じてきたように、シャンカラ派における信仰現象は、シャンカラの不二元論思想にみられる宗教理念とかなりのずれが見られる。このずれは、宗教理念と具体的な信仰現象との相違を如実に表わすと同時に、シャンカラの高邁な哲学が在家信者のあいだで、どのように受け容れられてきたのかを具体的に物語っている。

- 1 Śaṅkara, *Bhagavadgītābhāṣya* (略号 GBh), VI.37, p. 113, IX.23, p. 145, XVII.1, p. 246, XVII.17, p. 251. Śaṅkara, *Bṛhadāraṇyakopaniṣadbhāṣya* (略号 BUBh), I.v.3, p. 698, III.ix.21, p. 841, *Chāndogyaopaniṣadbhāṣya* (略号 CUBh), VII.xix.1, p. 560, *Muṇḍakopaniṣadbhāṣya*, II.i.7, p. 157, *Praśnopaniṣadbhāṣya*, I.2, p. 107, *Kāthopaniṣadbhāṣya*, I.i.2, p. 59. Cf. Minoru Hara [1964], pp. 124–145.
- 2 BUBh, I.v.3, p. 698.
- 3 CUBh, VII.xix.1, p. 560.
- 4 Śaṅkara, *Brahmasūtrabhāṣya*, III.iv.17, p. 789, III.iv.18, p. 790, III.iv.19, pp. 791–792.
- 5 BUBh, III.ix.21, p. 841.
- 6 シャンカラの「信」(śraddhā)の規定は「不信」(aśraddhā)の説明によって補われる。GBh, IV.40, p. 81. “. . . aśraddadhānaś ca guruvākyasāsteṣu avivāsanāmś ca.” シャンカラは aśraddhā を avivāsa とみなしている。
- 7 Paul Hacker [1954], S. 61.
- 8 Daniel H. H. Ingalls [1952], p. 7.
- 9 Śaṅkara, *Vivekacūḍāmaṇi* (略号 VC), 26, p. 40.
- 10 VC, 19–30, pp. 33–44. \$DV も「出家遊行者のものシテラッダーが六徳のうちの二つである」と記している。Cf. \$DV, V.85, p. 173. Dhanapati の *Diṇḍima* 注釈 (\$DV, p. 174) は「シテラッダーを「師とウパニシャッドの言葉に対する信頼」という形をとる」(gurvavedāntavākyeṣu viśvāsarūpā) と説明している。
- 11 Śaṅkara, *Sarvavedāntasiddhāntasārasaṅgraha*, 210, p. 148. Cf. Paul Hacker [1954], pp. 56–57.
- 12 伝統的には「マータヴァすなわちヴァイダーラシヤ(シテリンデーリ僧院の第二二世師 Vidyāraṇya)に帰せられるが、文献学的には「おそなへ一八世紀」の作品であると考えられる。
- 13 \$DV に記される「信」を分類すると、以下の三つに分類するほうができる。第一のタイプのシテラッダー「\$DV VI.9, p. 217, XVI.36, p. 585, XVI.39, p. 586. 第二のタイプ「\$DV I.59ab, p. 21, I.79ab, p. 25. 第三のタイプ「\$DV, XIV.134, p. 498. 註「シテラッダー」は「Yoshitsugu Sawai [1992], pp. 39–46 を参照。
- 14 *Dialogues with the Guru* (略号 DWG), p. 180.

- 15 “Two Teachings of Our Master—The Jagadguru,” p. 13.
 - 16 GBh, XII.20, p. 188.
 - 17 拙稿〔一九八三〕三四六—三四七頁を参照。
 - 18 Śaṅkara, *Upadeśasāhasrī*, p. 129. GBh, VI.47, p. 116. Cf. GBh, VII.21, p. 122, VII.22, p. 123, XII.20, p. 188.
 - 19 VC, 32, p. 46.
 - 20 VC, 32, pp. 46–47.
 - 21 VC, 32, pp. 46–47.
 - 22 シャンカラの哲学においては、中村元によれば、瞑想 (nididhyāsana) は念想 (upāsana) と同義であり、「反復」(avṛtti) という属性を内包する「動作」(kriyā) である。したがって、upāsana という語彙は「崇拜」と訳される向きもあるが、それは余りにも語源的に解釈しすぎであろう。さらに、念想も不二元論ヴェーダーンタ哲学の伝統では、恒常的祭祀 (nitya-karman) などの行為 (karman) とは異なるものと考えられる。中村元〔一九八九〕六五八—六六〇頁を参照。
 - 23 VC, p. 47.
 - 24 ロバート・E・グスナー (Robert E. Gussner) が行った、伝統的にシャンカラに帰せられるバクティ讃詩の文体・韻律に関する研究によれば、『ダクシナムールティ・ストーリー』の著者は、断言するところではわからないが、たぶんシャンカラ作であろうと云う。Cf. Robert E. Gussner [1976], p. 266.
 - 25 *Dakṣiṇamurti Stotra of Śrī Śaṅkarācārya*, X.23, p. 188.
 - 26 T. M. P. Mahadevan, *The Hymns of Śaṅkara*, v. 61, p. 139, v. 81, p. 156.
 - 27 *The Saundaryalaharī or Flood of Beauty*, p. 7.
 - 28 *Souvenir, Supplement to Sringeri Temples Kumbhaśhishekam*, p. 12.
-
- 29 ŚDV, XII.68–69, p. 542.
 - 30 Paul Hacker [1963], p. 155.
 - 31 DWG, pp. 145–146.
-
- 〈参考文献〉
一次文献
- Śaṅkara. *Bhagavadgītābhāṣya*. Edited by Bhagavat. Works of Śaṅkarācārya in Original Sanskrit, vol. 2. Delhi: Motilal Banarsidass, 1978. Originally published in Poona, 1929.
 - . *Bṛhadāraṇyakopaniṣadbhāṣya*. In *Ten Principal Upanishads with Śaṅkarabhāṣya*, edited by Śrī Govinda Śāstrī Tippani. Works of Śaṅkarācārya in Original Sanskrit, vol. 1. Delhi: Motilal Banarsidass, 1978.
 - . *Chāndogyaopaniṣadbhāṣya*. *Mundakopaniṣadbhāṣya*. *Prasnopaniṣadbhāṣya*. *Kathopaniṣadbhāṣya*. In *Ten Principal Upanishads with Śaṅkarabhāṣya*, edited by Śrī Govinda Śāstrī Tippani. Works of Śaṅkarācārya in Original Sanskrit, vol. 1. Delhi: Motilal Banarsidass, 1978.
 - . *Brahmasūtrabhāṣya*. Edited by H. N. Apte. Poona: Ānandāśrama Press. Part I, 1890, part II, 1891.
 - . *Dakṣiṇamurti Stotra of Śrī Śaṅkarācārya*. Edited and translated by Alladi Mahadevan Sastry. Madras: Samata Books. First printing, 1978.
 - . *Saravedantasiddhāntasārasaṅgraha*. In *Minor Works of Śrī Śaṅkarācārya*, edited by H. R. Bhagavat. 2nd ed. Poona Oriental Series, no. 8. Poona: Oriental Book Agency, 1952.

シャンカラ派における信 (śraddhā) の概念とその意味 (澤井)

11111111

- . *The Saundaryalaharī or Flood of Beauty, Traditionally Ascribed to Śaṅkarācārya*. Edited, translated and presented in photographs by W. Norman Brown. The Harvard Oriental Series, vol. 43. Cambridge: Harvard University Press, 1958.
- . *Upadeśasāhasrī*. Critically edited by Sengaku Mayeda. Tokyo: The Hokuseido Press, 1973.
- . *Yvekaśīdāmaṇi*. Commented upon by Candrasekharabharatī and translated into English by P. Sankaranarayanan. Bombay: Bharatiya Vidya Bhavan, 1979.
- Dialogues with the Guru: Talk with His Holiness Sri Chandrasekhara Bharati Swaminah*. Compiled by R. Krishnaswami Aiyar. Bombay: Chetana, 1956.
- Mādhava. *Śaṅkaradigvijaya*. Edited by M. C. Apte. Poona: Ānandāśrama Press, 1891.
- Souvenir, Supplement to Sringeri Temples Kumbhabhishekam*. Edited by Sringeri Souvenir Committee. Madras: Akhila Bharata Sankara Seva Samiti, 1964.
- “Two Teachings of Our Master—The Jagadguru.” In *Flowers of Devotion*. Edited by Akhila Bharata Sankara Seva Samiti. Srirangam: Sri Vani Vilas Press, 1964.

二次文献

- Gussner, Robert E. 1976. “A Stylometric Study of the Authorship of Seventeen Sanskrit Hymns Attributed to Śaṅkara.” *Journal of the American Oriental Society* 96, no. 2 (April–June): 259–267.
- Hara, Minoru. 1964. “Note on Two Sanskrit Religious Terms: Bhakti and

- Śraddhā.” *Indo-Iranian Journal* 7: 124–145.
- Hacker, Paul. 1954. “Über den Glauben in der Religionsphilosophie des Hinduismus.” *Zeitschrift für Missionswissenschaft und Religionswissenschaft* 38: 51–66.
- . 1963. “Śraddhā.” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens* 7: 151–189.
- Ingalls, Daniel H. H. 1952. “The Study of Śaṅkarācārya.” *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute* 33 (1/4): 1–14.
- Mahadevan. T. M. P. 1980. *The Hymns of Śaṅkara*. Sanskrit texts and English translation. Delhi: Motilal Banarsidass.
- 中村元 (一九八九) 『シャンカラの思想』 (岩波書店)
- Sawai, Yoshitsugu. 1992. *The Faith of Ascetics and Lay Smārtas: A Study of the Śaṅkaran Tradition of Sringeri*. Vienna: Sammlung de Nobili, Universität Wien.
- 澤井義次 (一九八三) 「出家遊行——シャンカラの不二元論ヴェーダーンタ哲学をめぐって——」 (楠正弘編『解脱と救済』平楽寺書店 三六一—三七九頁)
- (二〇一三) 「シャンカラの哲学への宗教学的視座」 (『印度学仏教学研究』第六一巻第二号、二五八—二六五頁)

〈キーワード〉 シャンカラ派、信 (シュラッダー)、バクティ、世師 (天理大学教授・PhD・博士 (文学))